伊予弁

仕事と遊びの境目

朝倉 雪江＝宇和島市・ウェブ開発者

月に１度、出張を組む。関東から九州までクライアントの元へ、直接話す機会を設けるためだ。メールや電話でのやりとりは手軽でよいが、やはり人間、まめに顔を合わせている方が親しみが湧くし、面と向かえばプライベートな会話も弾む。何より「飲みにケーション」には現地訪問が欠かせない。

仕事で相談される内容は、ウェブ開発を中心にデザイン、資料制作、撮影、英訳とさまざま。基本的にできることなら何でも引き受ける。専門外の分野でも、調べてみてできそうであればやはり請け負う。なんとなく、その方が楽しいから。

「遊び」とは、実利を問わず、心を満足させることを目的に行うものを指すらしい。とすると、私は毎日遊んでいるということか。

対応可能な範囲の広がりとともに、関わる人の数も増えてきた。仕事だけでなく、ボランティアでお手伝いしている活動にも進展があり、いろんなものが一斉に開花し始めたと感じている。

このごろふいに、仕事と遊びの境界線を考える。お金をいただいたら仕事？　技術支援するけど、単純に面白そうだから協力する場合は？　普段「仕事」と一くくりにしがちだが、当人が楽しんでいる限り、ある意味それは遊びなのかもしれない。事実、蒋淵に関する活動全般、仕事と捉えたことはない。

心持ち次第で遊びにも仕事にもなり得るなら「積極思考で全てを遊び、楽しめたら生きるのが楽になりそう」と、飲み過ぎた出張の翌日、思いを巡らせた。

「伊予弁」2023年10月13日付 愛媛新聞
（掲載許可番号：d20231020-01）